校長室だより～燦燦～ №７９３

教育実習生

2023.7.15

この前、職場に手紙が届いた。封筒に手書きでインクの文字である。今では、このようなものをいただく機会は減ってしまった。そもそも自分が、手紙をしたためるということをしていない。封筒の中には、インクによる丁寧な文面の便箋が入っていた。

私が、以前勤務していた学校に、音楽の先生を志す教育実習生がやってきた。その学生は、私の学級に配属となった。封筒の裏には、差出人のお名前があった。脇には旧姓が書かれてあった。それで、すぐに、あのときの教育実習生だとわかった。

手紙の文面には、突然の手紙であること、１８年前に教育実習でお世話になったこと、大学を卒業後、大学院に進学し、その後は結婚したこと、今は小学６年生と２年生の娘さんがいること、ＰＴＡの副会長を務めて１年が過ぎたことなどが綴られてあった。

ＰＴＡという立場で頭を悩ますことも多いが、非常にやりがいがあり、楽しいそうである。そう感じることができるのは、私との縁が原点だと記されてあった。ふと立ち止まるとき、私が教育実習ノートに書いたことばを心に留めて日々を過ごしているという。教育実習のときに、彼女はすごいなと思ったこと、いい先生になるだろうなと思ったことは、今でも覚えている。

６年生の娘さんが、家で音読をしたときの題目が「薫風」だという。あの当時、私が出していた学級通信のタイトルが「薫風」だった。彼女のことを学級通信「薫風」に紹介したことがある。彼女は、今でもそれを大切に手元に置き、時折眺めているのだという。

彼女の実習期間は、たったの２週間である。出会いとは、期間の長さ、時間の長さではない。たった一瞬でも、何があったか、どのくらい心が通い合ったかである。彼女の２週間は、今でも記憶に残っている。パソコンには、ピアノを弾く彼女や学級の生徒と一緒に写った彼女の笑顔が残っている。

きっと、あの頃の私は、まだ学生だった彼女に、何かを感じていたのだと思う。今の学校に来てからも、毎年、教育実習生が来ている。それぞれ、持ち味があり、将来が楽しみである。教員不足と言われている今の時代、教員になってほしいとは思う。だが、ならなかったとしても、その人の人生において、教育実習という期間が、輝いていればと思う。手紙の彼女の２週間は、今でも輝いているはずである。

これは、久しぶりに、手書きの文面をしたためるかと覚悟を決めて、ちょっと待てよと思い出した。LINE に彼女の名前があったことを思い出した。今でもつながるのか不安だったが、とりあえずメッセージを送ってみた。すぐに返信がきた。使える。というわけで、LINE に長々とした文面をしたためた。便利である。

彼女からいただいたお手紙は、私にとって宝物である。ずっと取っておこうと思う。そして、時折読み返して、今後の人生の糧としたい。